The Japan Society of Educational Sociology

高校生の進学意識の差異

—全国公立高校の調査（1999 年）から—

○武内清（上智大学）　○浜島幸司（上智大学大学院）　深谷昌志（東京成徳短期大学）

1. 調査の意図とサンプルの構成

21 世紀を前にして、社会や教育のあり方が大きく変わりつつある。社会と教育の接点に、生徒の進路意識がある。変化の時代の中にあって、高校生の進路意識の実態を明らかにしたいというのが本調査の目的である。高校生の進路意識の全体像を明らかにするだけでなく、高校や生徒の中の差異や分化にも注目したい。高校生の進路意識は、地域、親の学歴、学校、性別、成績等の要因によって分化している。

現在全国に高校は 5481 校ある（1999 年度）。一部の大都市を除き 4 年制大学への進学の高い実績があるのは、全国的にみれば私立高校ではなく公立高校である。そこで今回は公立高校の生徒を対象に進路意識に関する調査を実施した。

全国を 7 つのブロック（北海道、東北、関東、中部、関西、中四国、九州）に分け、それぞれのブロックから原則として 2 校ずつ対象校を選定した（関東と関西はそれぞれ 1 校）。それぞれのブロックで、大学進学者の多い学校で調査を実施した。対象は高校 2 年生。調査時期は 1999 年 2 月～3 月。1 年先の受験を具体的に意識しはじめる時期の調査である。4266 名から回答を得た。

調査対象校の特質とサンプル数を表 1-1 に示した。

表 1-1　調査対象校の特質

学校略号	A	B	C	D	E	F	G
所在地	北海道	北海道	東北	東北	関東	中部	中部
4年制大学進学希望率	**87.1**	46.5	90.0	76.4	87.9	86.3	92.9
難関大学進学希望率	**52.1**	11.7	28.0	17.8	50.4	69.0	39.8
センター試験受験希望率	**77.6**	50.2	62.3	61.1	63.3	90.5	80.3
中３の成績（上）	**42.9**	1.9	44.6	6.8	44.0	73.9	50.4
第１志望入学率	**59.1**	19.7	65.2	42.5	60.2	83.4	63.6
父親大学卒	**47.9**	35.9	58.7	29.6	49.7	62.2	39.5
母親大学短大卒率	**38.8**	35.1	47.6	29.9	42.4	55.9	40.5
東大・京大合格者数	**0**	0	0	0	1	25	5
浪人率（平成10年度；%）	**28**	6	12	16	37	45	17
サンプル数	389	368	281	292	266	319	380
学校グループ	A	C	B	C	B	A	B

学校略号	H	I	J	K	L	計
所在地	関西	中四国	中四国	九州	九州	
4年制大学進学希望率	95.1	84.3	84.5	95.2	54.4	**84.3**
難関大学進学希望率	72.2	30.8	15.2	76.9	20.6	**40.3**
センター試験受験希望率	88.6	80.9	76.3	86.9	24.3	72.6
中３の成績（上）	80.8	30.8	6.0	75.5	2.0	37.7
第１志望入学率	70.1	69.4	26.8	72.6	20.1	53.4
父親大学卒	54.2	48.8	43.1	68.7	33.3	47.6
母親大学短大卒率	52.1	42.6	42.1	54.6	29.4	42.0
東大・京大合格者数	32	1	0	12	0	76
浪人率（平成10年度；%）	–	36	5	39	8	23
サンプル数	345	364	402	424	436	4266
学校グループ	A	B	B	A	C	

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

調査対象校を、高校入学時の学力や大学進路実績等によってABCの3つのグループに分け、高校間格差（グループ）の指標として分析に使用した。4年制大学進学希望者の平均はAグループ校では93.3%、Bグループ校では87.8%、Cグループ校では54.9%と、今回の調査対象校は、日本の全体の学力レベルからすると中の上以上の高校である。

2. 高校生の進学意識の特質と差異の概要

全体的な結果は、堅実な高校生が多く存在するということであった。大学受験を1年後に控えながら、受験勉強が普段の生活を圧迫し高校生活を暗くしている様子は伺えない。8割近くの生徒は何らかの楽しみを学校に見出している。受験のことが気になって仕方がない生徒は2割と少ない。塾や予備校に行っていない生徒は8割にも及ぶ。「有名大学」や「偏差値の高い」大学より、「自分の希望する学部」のある大学に進学したいとするものが8割以上いる。そして、1年先には、センター試験を受けて大学に入ろうとするものが7割以上いて、推薦入学で大学に入ろうとするものは1割である。

大都市だけで若者や高校生の生態や意識を見ていると、以前と変わったと思うことも少なくないが、全国的には、昔と変わらない高校生活が営まれていることをデータは語っている。しかし、高校生の中にも、差異化・分化が進行して、画一的には語れない現実もある。

高校生の進路意識を分化させている第1の要因は、業績主義（メリット）的なものである。高校生を学校グループと成績で9つに分けて検討して見ると、最上位のAグループ校で成績上位の生徒は、親の学歴が高く、難関大学を目指し、学校の授業に真面目に取り組み、授業への満足度が高く、部活や友人への満足度も高く、学校生活全体が楽しいと感じている。自我像も明るい。受験の為にいろいろなことを犠牲にして暗い生活を送っているわけではない。大学選択の理由も、就職や遊びのためというのではなく、専門の勉強のためという明確な問題意識を持っている。親に頼り自分の身辺の自立に欠けるという問題はあるが、自分の将来についてもしっかりと目標をもっている生徒たちである。最下位のCグループ校で成績の下位の生徒は、勉強に熱心に打ち込んでいるわけではない。部活への参加も中途半端である。現在の高校が第1志望の学校でなく、学校生活全体があまり楽しくない。高校卒業後は入れる大学や短大、場合によっては専門学校や就職してもよいと考えている。大学に行くとしても、それは勉強のためというよりは、就職に有利にするためであったり、自由な時間にバイトをしたり遊んだりするためである。

第2の分化は、性差によるものである。男子に比べ女子の方が大学入学動機に積極的な姿勢が見られる。女子に多いのは、「やりたい勉強ができる」（女子45.6%、男子31.9%）、「専門的な知識が学べる」（女子 49.7%、男子37.1%）、「資格を取る」（女子 35.9%、男子21.3%）、「将来の仕事につなげたい」（女子64.6%、男子 49.8%）などである．また「大学の知名度」より「自分の希望する学部」を優先するというものは女子に多い（女子88.0%、男子79.5%）。しかし、第一志望の大学・短大に入れなかった時、「浪人する」は男子28.3%に対して女子 14.9%と少ない。女子には浪人忌避の規範がある。女子の浪人は将来の就職にも結婚にも不利に働く。この女子の浪人忌避の規範の存在が、浪人しないと難関大学には入れないという高校教育や入試の仕組みとあいまって、女子の低い4年制大学進学率や難関大学への進学率の低さを作り出している。18 歳人口の減少の中で、4年制大学への現役入学率が上がれば男女差は縮小し、4年制大学や難関大学に進学する女子も増加するであろう。

その他さまざまな要因によって、高校生の進学意識が差異化・分化している。親の学歴（高学歴の親の子どもの方が 4 年制大学志望や難関大学大学志望が高い、職業アスピレーションが高いなど）、地域別（東日本と西日本、都市と農村の進学意識の違い）、入学した高校が第1志望の高校かどうかによる違い（第2志望の高校に入りやる気をなくす場合、逆に成績がよく自信をつけ難関大学を目指す場合があるなど）、専攻別の大学選択・学部選択理由の違い（理系は勉強志向で、文系は遊び志向など）が考えられる。

高校格差・成績といった業績（メリット）を基点にして、それに親の階層、ジェンダー、生徒文化、進路指導、大学選抜方式等が複雑に絡み合い、高校生の進路意識は分化、差異化している。

そのような中で、どのような進路指導や大学入学選抜が行なわれるの好ましいのかが、まさに考えられなくてはならない。

（武内清）

（本発表は、モノグラフ高校生 Vol.57『大学受験の「現在」』ベネッセ教育研究所、1999年の再分析である）

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

3. 高校生の進学意識規定要因の分析

3-1 はじめに

本節では、前者の問題をふまえつつ、データをもとにしながら、実際に進学意識構造を分化させる要因について、細かく検討していきたい。

着目すべき点としては、まず本調査対象となった高校生の大半が、一般入試（学力一斉筆記試験）を希望していることである。特に、センター試験型での受験を希望している。最近では、私立大学もセンター試験への参入を多く果たしており、必ずしも国立大学志向を表しているサンプルとはいえないが、ともかくも、一般入試受験を強く意識する層である。これは入学者数が増大している推薦入試等の希望者とは異なった層である。マス化した高等教育選抜社会においてもなお筆記試験で難関大学等を目指すエリート機関参入者の意識といえよう。

これまで、マスーエリートの進路意識の差異を検討した研究がいくつかあるが、エリート内の分化構造を検討した研究は少ない。エリート機関を目指す人々内部でも多層に分化する現代の高校生の進路意識を明らかにしたい。

また、各地方有数のエリート公立高校を対象とした、全国規模での調査も他にはない貴重なデータであることも強調しておきたい。

このような特徴をもつ高校生の進学意識を分化させる要因を提示し、分化をもたらす要因の規定力について検討・分析していく。

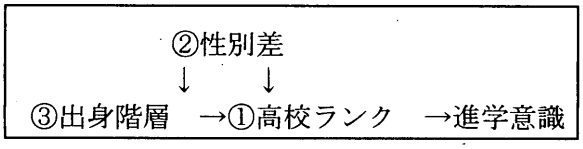
3-2 進学意識の規定要因

これまで、いくつか存在する高校生の進学意識研究の視点を、以下の3点に大別することができる。下にこれらの視点を検討する際の具体的な指標項目も加えてみた（下線部は本分析で使用する項目）。

①高校ランク（=学校グループ）
　　学力レベル（有名大学への進学数）
　　進路志望時期（進学アスピレーション）
　　学校・生徒文化
②性別差
　　文系・理系
　　将来目標
　　a　職業アスピレーション
　　b　結婚後の家庭について
③出身階層
　　家の豊かさ（経済力）
　　親の学歴（父母　高【F・M】低【f・m】）

この3点は、それぞれ独立した軸をあらわしているわけでもない。むしろ非常に高い相関を伴いながら、検討されてきたものである。従来のトラッキング・生徒文化研究では、③出身階層が、①高校ランクを規定し、これらが階層再生産装置として機能していることを明らかにした。②の性別差は、③と①に潜在的に内在するものと位置づけられる。中でも、性別による「社会化」の異なる過程を強調するジェンダー・トラッキング研究がある（図3-1　参照）。

図3-1　従来の進学意識規定構造モデル

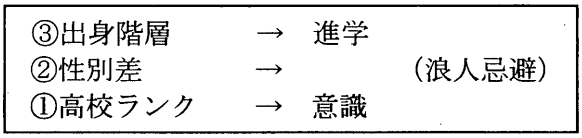


しかしながら、現在は上記のような過程が破綻したのではないかという疑問もあがっている。例えば、「トラッキングの弛緩」仮説（樋田ら，2000）のように、かつてのように学校ランクの媒介を伴わずに、高校生の進路選択が行なわれているのではないかという見解がある。また、学習時間の長さを指標として、学校効果を経ない、出身階層による規定が報告されている（苅谷，2000）。階層再生産に高校ランクの機能が弱くなったことを示唆する。

それでは、進学意識に③出身階層の影響力があるという場合、これまで中間的位置にあった①高校ランクや②性別差はどのくらい弱くなったといえるのであろうか。規定力の弱さが主張されるのならば、どのような結果なのか検討を行う必要性が出てくる。

そこで、それぞれの視点を独立させるという方法を用いて、進学意識を分化させる要因として何が規定するのかみていく（図3-2　参照）。

図3-2　現在の進学意識規定構造モデル



3-3 分析

進学意識の分化を示す指標として、ここでは、「どのような進学希望（難関4年制大学・普通の4年制大学・短期大学等）」を用いる。併せて、仮に第1志望の大学に合格できなかった際の進路選択（浪人をする・第2志望の大学に入学する・第2志望の大学に入って来年再受験をする）について（「浪人忌避意識」）も、どのように考えられているか、それぞれの属性によって特徴がみられるのかみていく。この結果を高校生の進学意欲・目標を判断する材料としたい。

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

3-3-1　高校ランクによる進学・浪人忌避

表 3-1　進学・浪人忌避×高校ランク（セル内は%）

ランク	難関4大	一般4大	短大	専門学校	就職	他	N(100.0)
A	67.5	26.0	2.2	1.2	0.8	2.2	1476
B	31.7	56.1	2.0	6.0	1.4	2.7	1687
C	16.8	38.1	13.8	18.9	6.9	5.5	1092
合計	40.3	41.0	5.1	7.7	2.6	3.3	4255
カイ2乗	1238.129	自由度 10		p<0.001			

ランク	浪人	第2志望へ	再受験	専門学校	就職	他	N(100.0)
A	34.7	49.6	1.6	2.9	5.3	6.0	1428
B	16.5	63.3	2.5	5.7	5.5	6.5	1536
C	9.9	55.7	1.3	15.1	8.2	9.8	788
合計	22.0	56.5	1.9	6.6	6.0	7.0	3752
カイ2乗	344.242	自由度 10		p<0.001			

3-3-2　性別差による進学・浪人忌避

表 3-2　進学・浪人忌避×性（セル内は%）

性別	難関4大	一般4大	短大	専門学校	就職	他	N(100.0)
男	46.1	43.1	0.6	3.8	2.7	3.7	2188
女	34.1	38.9	9.9	11.8	2.5	2.7	2053
合計	40.3	41.1	5.1	7.7	2.6	3.3	4241
カイ2乗	313.382	自由度 5		p<0.001			

性別	浪人	第2志望へ	再受験	専門学校	就職	他	N(100.0)
男	28.3	48.7	2.0	5.7	7.3	8.0	1997
女	14.9	65.5	1.8	7.7	4.5	5.7	1742
合計	22.1	56.5	1.9	6.6	6.0	6.9	3739
カイ2乗	148.407	自由度 5		p<0.001			

3-3-3　出身階層別による進学・浪人忌避

表 3-3　進学×出身階層（セル内は%）

父母学歴	難関4大	一般4大	短大	専門学校	就職	他	N(100.0)
fm	34.7	43.9	6.0	9.0	3.7	2.7	1041
fM	36.1	41.6	6.6	9.1	2.6	4.0	274
Fm	43.1	39.9	5.4	7.1	2.0	2.5	552
FM	47.9	40.9	3.5	4.3	1.0	2.3	1157
合計	41.4	41.8	5.0	6.9	2.3	2.6	3024
カイ2乗	75.918	自由度 15		p<0.001			

家庭	難関4大	一般4大	短大	専門学校	就職	他	N(100.0)
豊か	50.9	35.5	3.5	6.4	1.4	2.3	733
ふつう	38.4	44.8	5.4	7.0	1.9	2.5	2040
豊かでない	35.9	41.0	5.0	9.0	4.5	4.5	797
合計	40.4	42.0	4.9	7.3	2.4	2.9	3570
カイ2乗	75.473	自由度 10		p<0.001			

表 3-4　浪人忌避×出身階層（セル内は%）

父母学歴	浪人	第2志望へ	再受験	専門学校	就職	他	N(100.0)
fm	17.7	57.2	1.7	8.2	7.7	7.5	897
fM	16.4	59.2	0.4	7.1	9.7	7.1	238
Fm	23.6	55.2	2.6	5.6	6.7	6.3	496
FM	24.9	58.5	2.0	5.5	3.7	5.5	1082
合計	21.5	57.5	1.9	6.6	6.1	6.4	2713
カイ2乗	50.014	自由度 15		p<0.001			

家庭	浪人	第2志望へ	再受験	専門学校	就職	他	N(100.0)
豊か	23.6	58.2	1.9	5.8	4.3	6.1	670
ふつう	20.5	60.0	1.6	6.4	5.5	6.1	1832
豊かでない	20.6	49.5	2.8	8.3	9.9	8.9	675
合計	21.2	57.4	1.9	6.7	6.2	6.7	3177
カイ2乗	46.208	自由度 10		p<0.001			

3-3-4　進学・浪人忌避を強く規定する要因

クロス表より、どの要因からでも進学意識は大きく分化（重層化）している。それでは、これらの意識を規定する最も重要な要因は何かをみるべく、ロジスティック回帰分析を行った。

表 3-5　進学を強く規定する要因

難関4大進学		難関4大=1　それ以外の大学=0	
	(独立変数)	回帰係数	Exp(B)
性別	性(男=0　女=1)	−0.361 **	0.697
高校ランク	ランクA(A=1　以外=0)	1.533 **	4.633
出身 父学歴	(高専・大卒=1　以外=0)	0.156	1.168
階層 母学歴	(短大・大卒=1　以外=0)	0.013	1.013
家庭	(豊か=1　以外=0)	0.463 **	1.588
	Constant	−0.740 **	
	−2 Log Likelihood	3236.050	
	Model Chi-Square	404.209 **	
		N=2634	
	有意水準 * p<0.05 ** p<0.01		

表 3-6　浪人忌避意識を強く規定する要因

浪人忌避		第2志望の大学へ=1　浪人する・再受験=0	
	(独立変数)	回帰係数	Exp(B)
性別	性(男=0　女=1)	0.905 **	2.473
高校ランク	ランクA(A=1　以外=0)	−0.774 **	0.461
出身 父学歴	(高専・大卒=1　以外=0)	−0.328 **	0.720
階層 母学歴	(短大・大卒=1　以外=0)	0.124	1.132
家庭	(豊か=1　以外=0)	−0.056	0.946
	Constant	1.005 **	
	−2 Log Likelihood	2437.832	
	Model Chi-Square	172.491 **	
		N=2169	
	有意水準 * p<0.05 ** p<0.01		

3-4　まとめ

クロス分析・回帰分析の結果、進学意識の規定要因として、以下のことが明らかになった。

① 高校ランクによる進学意識の分化規定力は依然として本生徒たちに強く存在する
② 性別の影響は、女子に浪人忌避を強く感じさせ、これは高校ランク以上である
③ 出身階層（=家庭の豊かさ）の影響も①高校ランクや②性別に比べれば弱い部分であるが、みることができる

出身階層を高校ランクに転化し、受験社会に勝ち上がっていく構図が現代も維持されているとみることができる。このように、エリート公立高校生たちは、出身・性別・高校ランク（学校文化）が複雑に絡み合った状況の中で、「望ましい」進路トラックを探索している。

（浜島幸司）

分析に関する詳細データや参考文献等については報告時配布レジュメを参照されたい。

NII-Electronic Library Service